水の源

MIZUNOMINAMOTO

2011.6
13

巻頭インタビュー　水源の里へ思いを馳せる

水源の里に舞い降りる妖精たち

イラストレーター　永田　萠さん

フォトストーリー
伝統和紙工芸（愛知県豊田市）
名工 山内一生さんに聞く

ウォークルポ
生活をかけた、野生動物との戦い？
―鳥獣害問題の現状を追う―　徳島県東みよし町

水源の里発　おすすめご当地グルメ
島根県浜田市
「どんちっち鰈入りカレー」
群馬県みなかみ町
「たくみの里　のむヨーグルト」

巻頭インタビュー

水源の里へ思いを馳せる

「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」。
「水源の里」の理念は、双方の地域に住む人たちが
お互いの暮らしや環境への理解や感謝が通い合ってこそ実現します。
このコーナーでは、文化人・著名人に、そうした「水源の里」にまつわるお話をうかがいます。

［聞き手］『水の源』編集長　町井 且昌　　於：ギャラリー妖精村

水源の 里に舞い降りる妖精たち

永田（ながた） 萠（もえ）さん

デザイン会社、出版社等でグラフィックデザイナーとして勤務した後、1975年にイラストレーターとして独立。「カラーインクの魔術師」と呼ばれる技術と色彩感、花と妖精をテーマにしたファンタジックな作風で、画業35年目の現在も第一線で筆をとる。

絵本、画集、エッセイなど140冊を超える出版物の制作と共に広告媒体や企業商品等のコマーシャルアートも手がけ、公共機関に設置される陶板画や舞台ホールの緞帳も含め作品の展開は幅広い。日本郵便（旧郵政省）発行の切手もこれまでに39種を制作した。

1987年に『花待月（はなまちづき）』（偕成社）でボローニャ国際児童図書展青少年部門グラフィック賞を受賞。

国内では約200会場での巡回展のほかに、デンマーク、台湾、フランスでも作品展を行い、可能性を開き続けている。

カラーインクの世界へ

―― 永田さんのような職業は何とお呼びするんですか。

イラストレーターですね。絵本の仕事もその一部です。自分で文を書き絵も描く場合と、挿絵だけを担当することもあります。文も絵も両方手がけるのが絵本作家で、絵だけを描く人は挿絵画家といいます。これまで140冊くらいの本に関わらせていただきました。絵本とかエッセイとか。

―― 今では「カラーインクの魔術師」という呼び声が高いですね。お使いになっているカラーインクというのはどんなものですか。

絵を描く画材ではないですね。デザイン用のカラーインクで、フランスのPBO（ペーベーオー）のものを使っています。70色ほどあるんですよ。水溶性ですから、水で薄めて日本画の技法のように使います。混色がしやすく発色がいいのです。

―― 京都には長くお住まいですか？

40年くらいになります。学校を出てから、ずっと京都を拠点にしています。デザイン会社や出版社に勤めた後、1975年にグラフィックデザイナーとして独立しました。

―― 海外にもよくお出かけのようですね。

そうですね。外国から帰ってくると、日本の当たり前の環境がどんなに豊かで恵まれているかが分かります。別の目で見られるっていうか。つくづく水がきれいな国だと思います。清らかという感じですね。

海外ではフランスが好きで特に田舎がいい。田園風景もいいし、農村の佇まいもいいですね。毎年訪れていて、何か月も滞在することもあります。

―― 日本国内で、お気に入りの場所はありますか。

京都の他に小樽、神戸それと生まれ故郷の加西が好きです。加西市というのは播州平野にあって、気候が温暖な加古川流域の町です。自然がたくさんあったので、野山をかけ回って育ちました。里山風景は私の創作のエネルギーになっていますね。都会に育っていれば、今のような作風ではなかったと思います。

小樽は、海が見えて雪が降るところに憧れがありました。もう小樽へ行き来するようになって25年にもなります。

—— お仕事は京都で。

上賀茂神社の近くの自宅が仕事場です。あのあたりでも、このごろ猿が群れで出没するんです。メダカを飼っているんですが、その水槽に手を突っ込んで悪さをして困っています。取って食べるわけじゃないんですが……。

仕事がありますから、京都市内に居ついていますが、自然が多い田舎に住みたい気持ちは強いです。

—— ご主人の HATAO さんも絵を描かれるんですね。

はい。イラストレーターというのは、誰かから注文を受けて描くんですが、主人は他からいわれなくても自発的に創作意欲で描くというジャンルになります。水彩絵具や色えんぴつを使った抽象画が多いですね。

—— お二人で合作されることもあるんでしょうね。

ありますが、あまりしません。主人が文章を、わたしが絵を受け持って、「見渡す限りお花がいっぱい咲いていました」という、たった一行の文章を主人が書くとしますね。でもわたしは一日がかりで、画面いっぱいにせっせと花を描き続けることになるので（笑）。

水源の里で元気をもらう

—— 2009 年でしたか、絵本『水の旅はるか　水天童子ものがたり』を水源の里のために描いていただきましたね。わたしはこの絵本を拝見したとき、「あっ！この情景は見たことがあるな」という感慨を覚えました。デジャ・ヴュというんでしょうか。リアリティーがあって。

自分で実際に見てみないと絵には描けないんです。同じ海でも日本海と瀬戸内海と太平洋の景色や水の色は違いますよね。そのために絵の依頼があると現場に足を運びます。

—— 『水の旅はるか　水天童子ものがたり』を描いていただいたとき、由良川の源流から河口まで丹念に現場取材をしていただきました。

とにかく絵本のコンテ（構想）がまとまると、一度は現場を見ないと気がすまない。そしてカメラを離さない。

これを描こうと思うと、畦道の花でも小川の水でも、そういう目で見ているんです。現地の空気や風から感じることもたくさんあります。花や植物のことは大体分かっているつもりですが、例えば「虫」となると分からないこともあります。脚の数が足りないとか。だから監修をお願いすることもあります。

—— 永田さんのテーマは「花」と「妖精」ですね。

そうですね。花も妖精も描いていて楽しいです。私にとっての妖精は夢のシンボル。夢をカタチにしたものだと思っています。日本でいうと「アマノジャク」とか「ザシキワラシ」。ちょっとユーモラスな精霊というイメージでしょうか。日本の野山にもたくさんいると思いますよ。

—— 今ちょうど、ここで絵本『みえとコウノトリ』の原画展が開かれていますね。

コウノトリもそうです。描く前に何回も観察に出かけました。リアリティーをしっかり描かないと本物のファンタジーの世界は生み出せないと思っています。例えば、コウノトリの背中に子どもが乗って空を飛んでいる絵がありますが、本当にコウノトリに乗って空を飛んだ人は多分いないと思うんです。でも実際にそうなったらどんな風景が見えるのかなとしっかり想像しながら描いています。

—— 水源の里連絡協議会では「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」というスローガンを掲げています。「水源の里」というとどんなことを連想されますか。

美しい水を守るという強い意志を感じると同時に、自分のことばかりでなく全体のことを考えるという、とても日本人らしい思いやりのある考え方で素敵だと思います。水源の里の皆さんは、健康な生活をしていらっしゃると感じます。

—— わたしも取材で水源の里を訪ねる機会が多いんですが、どこへ行っても皆さん元気で驚きます。高齢化、過疎化というマイナスイメージがあって元気がなくなっているんじゃないかという先入観があるんですが、それが見事に吹っ飛ぶ。

今回の大震災の後、水の大切さが日本人全体に再認識されたと思うんですね。「水への感謝とおそれ」という日本人の DNA が呼びさまされたんじゃないかと思います。

水の清らかさと元気な暮らしとは関係があると思います。皆さんの元気が希望ですね。わたしのほうが元気をもらうんです。

『水の旅はるか　水天童子ものがたり』には、次世代を担う子どもたちに水への感謝の気持ちを伝えていきたい……という想いが込められています。

インタビューを終えて

花と妖精が好きなイラストレーター。その作品の底流に流れる秘密をうかがっているようで、楽しいインタビューでした。現場に足を運ぶという強い意志も感じました。

Close-up

ギャラリー妖精村企画展のご案内

町家のお店や古い洋館が立ち並ぶ味わい深い京都の中心地にある永田萠さんの情報発信地。絵本・複製画・ステーショナリーなどのオリジナル商品が並ぶショップコーナーがあるほか、原画展が開催される。

6月21日（火）～7月10日（日）
永田 萠原画展－ドラマティックな色たち「青」
さまざまな色彩の組み合わせが特徴的な萠作品。
今回は印象的な「青」をテーマとした作品を集めました。

7月12日（火）～8月 7日（日）
妖精村オリジナルグッズフェア
来年度の新カレンダーをはじめ、期間限定セットなど、
モエグッズを中心にご案内します。

8月9日（火）～9月4日（日）
永田 萠原画展－もえの動物園
萠作品には意外と楽しい動物たちも多数登場しています。
モエワールドのファンタジー動物園にどうぞ。

〒 604-8182　京都市中京区堺町通三条上る フォルム洛中庵 1 F
TEL 075-256-5033　/　FAX 075-256-5032
月曜定休（祝日の場合営業）、年末年始休　10：00 ～ 18：00

Photo Story フォトストーリー

伝統和紙工芸（愛知県豊田市）

名工山内一生（やまうちいっせい）さんに聞く

水源の里には、様々な文化や伝統行事が残されています。
このコーナーは、多くの先人たちによって継承されてきた匠の技を全国の皆さんにご紹介します。
今回は、愛知県豊田市小原地区の和紙工芸の第一人者である山内一生さんを訪ね、お話をうかがいました。

豊田市紹介

日本最大の企業城下町が豊田市である。前身の挙母（ころも）町は、三河有数の繭の集積地だったことから、養蚕と製糸業のまちとして発展を続けてきた。変革が始まったのは、昭和初期。豊田自動織機製作所の自動車部工場が設置されたことに起因する。以来「クルマのまち」として、全国に、全世界に勇名をはせることとなる。昭和 26 年 3 月に挙母市として市制施行。昭和 34 年には市名を「豊田市」に変更した。クルマをキーワードに、アメリカ・デトロイトやイギリス・ダービシャーと姉妹都市を締結。自動車産業の中心地として発展を続けている。昭和 31 年から平成 17 年の間に 6 度の合併を重ね現在の市域に。面積は 918㎢、人口は 42 万人の愛知県における中核市である。

工業都市のイメージが強いが、県内一の農業生産額を誇る。松平郷、小原和紙、三州足助屋敷など、歴史や文化資源も豊富である。

冗談じゃない！ 山内一生さんは巨匠だった

和紙のふるさとの冨樫さんに今回の取材をお願いした山内一生さんの略歴を送ってもらった。読み進めるうちに背筋が寒くなってきた。昭和 28 年 10 月日展初入選以後入選 18 回、昭和 33 年 4 月マッカーサー米国大使へ寄贈、昭和 40 年 8 月佐藤総理大臣へ寄贈、昭和 54 年 5 月昭和天皇、皇后両陛下に制作を披露、昭和 58 年 8 月皇太子殿下、妃殿下行啓。なにこの人！

こんな巨匠が取材に応じてくれるのだろうか？　怖いもの知らずで、手を出してきた調子者のツケがこんなところで回ってきたか！　と反省したが、時すでに遅しだった。

予想に反して好々爺

約束の時間はいやおうなしにやってきた。玄関に立ち「ままよ！」腹を決めて声を掛けた。邸宅の奥から「おう、まあ上がれや。京都から…ほら遠かったろうに」と声が掛かる。写真で見た巨匠が、にこやかな表情で招き入れてくれた。

ちょっと意外、かなり安心。山内さんは、想像していたよりずっと普通の人だった。というより、親切で人間味があって、好々爺というと失礼か。事前に調べていた資料によると、山内さんの師である藤井達吉翁という人は、礼儀にとても厳しい人だったとか。約束の時間は守ったし、玄関で靴はそろえたし、お土産も受け取ってもらえた。出会いの第一場面は合格かな？　などと自己満足。三河弁なのだろうか、江戸っ子のべらんめい調に通じる、歯切れの良い話しっぷりが耳に心地良い。

芸術いうても、喰えなあかんで

開口一番「芸術じゃ言うても食えなあかんでの」。巨匠の口をついたのは、意外な言葉だった。「小原和紙工芸が次の時代に生き残れるかどうかは、この一点やな」とも。これらは一生さんの実体験に基づく言葉である。一生さんは、ご両親を３歳までに喪い親を知らない。それゆえ、少青年期の生活も貧困を極めた。そんな折、師となる藤井達吉翁の薫陶を二十歳で受けた。師弟でありながら、親子に通じる情を交わした二人の経緯（いきさつ）は、山内一生工房が発行した『縁（えにし）』に詳しく紹介されている。

取材の際に『縁』をいただき、拝読させていただいた。達吉翁が生きておられたら、一生さんのような人柄だったんだろうと思った。「芸術は人間性」という信念を貫いた師の教えを受入れ愚直に守り続けた人こそが、一生さんだったんだろうな―と。筆者の町で起業したグンゼ株式会社にも「良質な人間こそが、良質な製品を作る」という社是がある。芸術とものづくりの違いはあっても、人の道に通じる真理を垣間見た。

小原和紙は皇后陛下の寵愛も

「これだきゃ書いとくれ」と一生さんからお願いされたことがある。一生さんの貴重な時間、お茶と羊羹、色紙に本までいただいて、約束を果たさなければ、人として許されない（笑）。その話とはこうだ。

昭和 34 年４月、現在の天皇・皇后両陛下ご成婚の際、小原工芸紙による屏風「紅梅白梅・六曲一双」を一生さんら６人の小原工芸会員が献上。この屏風を美智子皇后さまが、宮中行事に必ずご使用になるほど愛用されたという。昭和 58 年、高校総体が開催され愛知県を行啓されたとき、美智子さまのたってのご希望により山内一生工房を訪問された。

美智子さまは「素案はどうされますか？　染料は何を使いますか？」などと、質問をされながら熱心に制作過程をご覧になった。この年と平成４年の２度にわたり、皇室から屏風の修復依頼もあった。紅梅白梅屏風は、一生さんと皇室を固く結びつけているのである。

（取材：永井 晃）

《富岳》

《竹林》

《新緑》

《生きる》

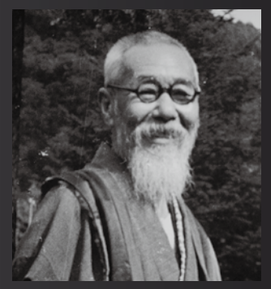
小原和紙

豊田市の小原地区は、和紙の原料となる楮（こうぞ）の育成に適し、室町時代から和紙の里として知られ、発展してきた。

小原村誌によると室町時代（1496 年）に紙漉き技術が伝えられたとの記述があり、歴史は 500 年を越える。農閑期の副業として小原地区に紙漉きは広がった。明治の頃には、番傘用紙や障子紙を集落の 27 軒で漉いていたという記録がある。しかし、和紙の需要の縮小に伴い、紙漉きを営む農家も減少。現在、和紙漉き農家は姿を消し、和紙工芸へと移行している。

藤井達吉

小原和紙工芸の最大の功労者は藤井達吉である。達吉は明治 14 年、現在の愛知県碧南市に生まれる。小学校卒業後、金工や七宝店で美術工芸の基礎を学ぶ。24 歳で上京。本格的に美術工芸の世界に身を投じる。伝統工芸の振興活動を通じて小原和紙と出会う。零細規模で営まれる小原和紙の先行きを案じた達吉は、昭和 20 年小原へ転居。集落の若者を集め、付加価値の高い和紙工芸を提案した。門下生に今回取材した山内一生さんも含まれている。達吉の指導の基本は、人格の形成。「芸術作品は、作者の人間性が優劣を決めるのであって、技術ではない―最後は『人格』に帰す」と若者に説いたといわれている。達吉は師も弟子もなく生涯独身で過ごすなど、一切の妥協を排する生き方から「孤高の芸術家」と呼ばれた。その生き様は、山内さんを始めとする多くの小原和紙工芸作家に伝授されることとなる。昭和 39 年、83 歳で他界した。



中嶋正悟さん

昭和 44 年高校卒業と同時に、山内一生氏に師事。昭和 46 年日展初入選以来 37 回の入選を数える。山内一生工房を手伝う傍ら自宅でも「紙すき屋工房」を主宰。昭和 62 年土岐市功労者表彰、平成６年日展東海展で中日賞受賞。土岐市在住、61 歳

取材を終えて

父親の口癖は「稔るほど頭を垂れる稲穂かな」だ。稔るというほど立派にはなっていない。それでも頭を垂れるという意味はおぼろげながら理解でき始めたのかな？　と感じている。人は決して一人で生きることはできない。どんな天才でも相手がいなければその天武を発揮することはない。生きていると思っている間は青二才。生かされていることに気づいて道半ば。感謝することができて一人前。自分はまだまだ人として道半ば。生涯研鑽の姿を一生さんから教えていただいた。ありがとうございました。

Walk Repo 水源の里

豊かな自然のなかで営まれる「水源の里」の暮らし。
そこには、都会には無い魅力があふれる一方、
都市部からは想像もつかない苦労もあります。
このコーナーでは、
そうした「水源の里」ならではの課題や取り組みに
スポットを当ててレポートします。

イノシシ被害

サル被害

ウォークルポ

生活をかけた、野生動物との戦い？

―鳥獣害問題の現状を追う―

徳島県東みよし町

東みよし町はこんなまち

人口は 15,623 人、面積は 122.55km^2、高齢者比率は 27.28％となっている。イチゴ、ソバ、ナスなどの農産物が特産品。徳島自動車道吉野川ハイウェイオアシスには、ＥＴＣ専用インターチェンジの設置し、中・四国、近畿圏域との交流連携の拠点として発展が期待されている。

初めて目の当たりにした鳥獣被害

徳島県の西北部、四国のほぼ中央部に位置する東みよし町。その真ん中には西から東へと吉野川が流れ、川を挟むように北には阿讃山脈、南には四国山地という急峻な山がそびえ立つ。吉野川沿いに広がる平野は田畑として開かれており、植えたばかりの稲の苗が気持ち良さそうに風になびいていた。大阪の中心部で生まれ育った私には、日ごろ出合うことのない中山間地域ののどかな風景にしばし心を奪われた。しかし、一見のどかなこの町で、日夜、生活を守るために動物たちとの戦いが繰り広げられているという。

「10 年前はこんなにひどくはなかったと思うんですけどね、年を追うごとに有害鳥獣による被害が増えています。被害も山間部から平地へとどんどん広がってきて……。最近では、町の近くの道路でシカやイノシシなんかを見かけることもありますよ」

取材に協力してくれたのは猟友会三加茂地区会長・嵯峨春海さんと三好地区会長・安富文一さん。2 人とも山に分け入って 20 年以上のベテランの猟師だ。普段は農業を営みながら、猟期である 11 月～ 3 月、もしくは被害が出たときに町の要請に応じて有害鳥獣を駆除している。

駆除の対象はイノシシ、サル、シカがメインだが、時にはカワウやカラスなどもあるという。

「イノシシは米や芋、サルは野菜や果物、シカは木の芽や樹皮なんかを荒らします。動物たちは食べごろを良く知っていて、さぁ収穫しようというモノを荒らすんです。イノシシなんか 1 晩あれば田んぼ 1 枚の稲は食い尽くしてしまいます。1 年かけて大切に育てた作物を一夜にして荒らされてしまうと、年配の農家の方は農業を続ける気力がなくなり廃業される方もおられます」

安富さんの言葉から、鳥獣被害は生活面だけでなく、人の気持ちの面でも大きな被害を与えていることがうかがえる。

後手、後手の対応策

害獣の捕獲・駆除方法は大きく分けて罠と銃の 2 種類がある。罠といえば、つい、鉄でできたトラバサミを思い浮かべてしまうが、現在ではそのような危険な罠は使わないそうだ。狩猟免許を持っている人が各自バネやワイヤー、水道管等を使い工夫を凝らして自作する。その罠には人間や標的としている動物以外が掛かってしまっても問題ないような工夫が施されていた。「実は、銃を持って犬と一緒に山へ分け入るよりも罠のほうがまだ効率的に捕獲できるんです」。それでも、動物たちも人間が考えるより頭が良く、そうそう罠に掛からない。被害が大きくなれば人海作戦で山に入ることもあるが、それでも、いうほどの成果はあげられないのが実情だ。「10 人で 4 日間山に入って、イノシシ 3 頭とかね。銃を構える私だって、大きなイノシシに体当たりされたら重傷は免れません。そう考えると本当に命懸けですね」と語る嵯峨さんには、猟犬をイノシシに 4 匹仕掛けて 2 匹を殺されてしまった辛い経験がある。

サル捕獲檻

イノシシ捕獲檻

田畑を荒らす野生のサルを追い払うモンキードック（コウ）

「昔はこのあたりの人は皆、猟銃を持って作物を守ったものですが、今では銃を持つ人は少なくなりました」。資格が必要になり、時代とともに条件がどんどん厳しくなっている。3 年に 1 度、書き換えのための検査や身辺調査もされ、銃や銃弾の保管も厳格に取り決められているため、猟友会の会員が減少するのも理解できる。「命をかけて、金かけて、時間や手間をかけないと銃を手にできない。強い意志がないとやってられないと思いますよ」

猟期前の射撃練習

安富さんは豪快に笑った。聞けば、35 年ほど前には 90 人もいた猟友会の会員も今では 15 ～ 6 人。新たに若者が入ることはないので、一番若い会員さんでも 40 代とのこと。

自分たちの作物を守るために大きな手間と費用がかかる現状。駆除に乗り出す人数が減れば、その分、動物が増えるのは当然だ。

町も鳥獣害対策として、動物たちの通り道や被害の大きな箇所に電気柵やワイヤーメッシュの防護柵などを設置している。カラスには有効な檻が開発されたため、捕獲効果も向上した。しかし「出て来たら」「被害が出たら」対応するという今の方法では抜本的な対策には結びつかない。

カラス捕獲檻
天井中央の開口部には多数の針金がぶら下がっており、開口部に向かって羽ばたけない仕組みになっている。

ワイヤーメッシュの防護柵

個体数調査で共存の道を探る

こうしたなか、昨年から新たにスタートしたのが、サルの動向調査。県から緊急雇用創出事業として提案されたこの取り組みは、東みよし町と、隣接する三好市とでそれぞれ、調査専門員を雇用。発信器を取り付けたサルの動向から、群れの規模や行動範囲などのデータを収集する。

「毎日、地図と受信機を片手に山林を回り、どのあたりに群れがいるのかを目視し、地図に落とし込みます。これを続けることでサルの群れの周期的な動きを把握することができますし、その群れが人に迷惑を掛ける群れなのかどうかも判明します」

収集したデータは、被害が出そうな時期や地域を予測して先手を打った対策を講じるためにも活用されるが、実

シカ被害

ヒヨ被害

取材を終えて

今までテレビで小耳に挟むくらいだった鳥獣被害。実情も何も分かっていない私のくだらない質問（「有害鳥獣は具体的にどの動物ですか？」とか「罠を仕掛けるのにも免許が必要なんですか？」等）に嫌な顔ひとつせずに解説してくださった皆さん。本当にありがとうございました。この取材を通じて、鳥獣被害の問題の大きさを痛感しました。

はもっと大きな役割が秘められている。データを分析してこの地域で共存可能な適正個体数を算出。鳥獣害問題に無関係・無関心の人にも実態を説明し、個体数管理の必要性を理解してもらう取り組みを進めている。

獣害は農村だけの問題ではない

私は今回の取材をするまで、鳥獣害問題に対する知識はゼロだった。加えてほとんど関心がなかった。都会で生活する人々の獣害問題に対する感覚は私と大差はないだろう。

安富さん曰く「ほとんどの人は関心をもっていないだろうね。でもいま解決しておかないと、現在の中山間地域の悩みは、いずれ市街地の悩みになっていくだろう」と。その言葉を聞いて、この問題の根源にたどり着いた気がした。獣害の最前線で生活されている関係者にとっては「大問題」であっても、都市で生活する人々にとっては「無関心」で「他人事」だというのが現実だ。獣害被害の実態や猟友会の後継者不足、銃規制の強化など、農村の深刻さが都市住民に正しく届いていないことこそが問題なのではないだろうか。嵯峨さんは「共存するのが一番よいこと。私たちもサルを撃つ時は躊躇する。でも対峙すれば撃たないわけにはいかない。自分の身が危険だし、農作物への被害は拡大する。だから仕方なく駆除する。私たちも分かっているんです。動物たちは精一杯生きているだけだと。でも、人間も快適に生活し、労働に見合う収穫を得たい。動物は山にエサがあれば、命をかけて人里までは下りてこない。だから、動物たちに生活可能な環境を与えてやれれば共存はできるんです」と話してくれた。

調査専門員の原田一さん、近藤俊雄さん、田岡啓作さん

左から猟友会の嵯峨さん、安富さん、東みよし町職員の福永さん

自然界の天敵による個体調整の機能が失われつつある現在、人と動物が共存するためにはどうしたらよいか？その答えは、人間が自然を支配しコントロールするという構図を改めなければならない…ということだ。鳥獣害問題は、水源の里だけの問題ではない。水源の里や農村集落で動物たちの需要が満たされなくなれば、次は都市部がターゲットとなる。だからこそ、今から都市住民も一緒になって考え、立ち向かっていかなければいけない。都会で生活していても農山村の生活や獣害の問題に関心を持ち、都会でできる「何か」に取り組んでいこうと思う。

【取材：藤井ゆい子、竹市直彦】

水源の里発

おすすめご当地グルメ

テレビ番組『ランキンの楽園』の「47 都道府県ご当地レトルトカレー」ランキングでも第 4 位にランクインしました。
「どんちっち」とは石見地方で盛んな神楽のこと。地元の子どもたちは賑やかなお囃子を聞いて育ち、いつしか神楽のことをその音色から「どんちっち」と親しみを込めて呼ぶようになったそう。

どんちっち鰈（かれい）入りカレー 420円

島根県 浜田市

干かれい日本一のまち島根県浜田市。かれいの中でも最高級と言われる「笹かれい」が、丸ごと一尾入ったインパクト抜群の「鰈入りカレー」。人気テレビ番組『秘密のケンミン SHOW』で紹介され一躍有名になり、いまや浜田市の名物土産となっているレトルトカレーです。

『カレーの中を華麗に泳ぐかれいの姿をお楽しみください』と、やや親父くさいダジャレが書かれたパッケージ。なんともシャレの利いたネーミングに思わず笑ってしまいました。開封すると、中には真空パックされたかれいとカレーのパウチ 2 袋が。食べ方はご飯にかれいをのせ、その上にカレーをかけていただきます。おそるおそる一口……気になるお味は、ほんのり脂ののった塩味の笹かれいと、野菜が溶け込んだやや甘めのフルーティなルーが相性抜群。トロリとしたルーとホロッとほぐれるかれいの身が口の中で絡み合いながら魚介風味の味わいを奏で、とっても美味 !!

干して旨味を凝縮させて、香ばしく焼き、高圧による独自のレトルト製法で加工されたかれいは、頭や骨までやわらかく、まるごと食べられます。カレーと一緒に食べることで、魚独特の臭みも気にならず、普段あまり好んで魚を食べない我が家の子どもたちにも大好評でした。カルシウムなどの栄養も手軽に摂れるので、小さなお子さんはもちろん、ご年配者へもオススメです。カレーとかれいのセットで 420 円という価格もお値打ち。「冗談のような組合せを考えた方に拍手！」の逸品です。

なお、商品は浜田市の駅や道の駅、都内アンテナショップで購入する以外に、お取り寄せすることもできます。 【取材】白波瀬聡美

【お問い合わせ】

島根さんれい株式会社
〒 697-0017
島根県浜田市
原井町 3050 番地 7
TEL **0855-22-3225**
FAX 0855-23-4788
http://www.sanin-sanso.co.jp/group/food_sanrei/index.html

浜田市商品開発委員会
〒 667-0027
島根県浜田市殿町
124-2
TEL **0855-22-3025**（代）

水源の里発

おすすめご当地グルメ

たくみの里　のむヨーグルト

150ml
130円～

群馬県 みなかみ町

利根川源流の「みなかみ町」は、「一ノ倉沢・マチガ沢」に代表される国内第一級の谷川岳や、町内各地に湧き出る豊富な温泉などの雄大な自然に抱かれる町。そんなみなかみ町のイチオシグルメが「たくみの里　のむヨーグルト」です。

木工や竹細工、そば打ちなどが体験できる24戸の「たくみの家」が点在する体験型観光スポット「たくみの里」のヨーグルト工房で作られるこのヨーグルトは、地元の酪農家が丹精込めて育てた牛から搾った新鮮で良質な「生乳」のみを使用。搾りたての生乳を丹念に発酵させ、徹底した品質管理と衛生管理の下、時間をかけいくつもの工程を経て「のむヨーグルト」に仕上げられます。添加物は一切使用されていないので乳幼児にも安心！　良質なタンパク質とカルシウムがたっぷりで、豊富な乳酸菌により整腸作用や免疫力アップにも効果的だそうです。

美容にも嬉しいヘルシーヨーグルトにウキウキしながら、早速ゴクリと一口。おっ、滑らかな口当たり！　ミルキーで市販のものよりかなりの濃厚さながら、しつこすぎない甘さで、後味もスッキリ。ツンとした臭みのないマイルドな酸味と爽やかな香りのバランスも◎。牛乳本来の風味が生かされた、コクがあるのにサッパリとした味わいのヨーグルトは飲みやすさ満点です。普段ヨーグルトに馴染みのない同僚も一様に「濃くて美味しい！　これで130円なら買いやなぁ～」と、職場内でも大好評でした。みなかみ町自慢のこだわりヨーグルト。まさに「一飲の価値アリ」ですよ～。

なお、商品はたくみの里「豊楽館」、町営温泉「遊神館」、フルーツ公園「桃李館」、猿ヶ京温泉「まんてん星の湯」、みなかみ町内スーパー及び商店等で購入できるほか、お取り寄せすることもできます。

【取材】白波瀬聡美

日本百名山の一つである谷川連峰の麓に位置する「たくみの里　ヨーグルト工房」。清廉な空気と水、昼夜の温度差が育んだ豊かな自然の恵みを生かし、本物の美味しさにこだわった製品を作っています。

宅配用のセット商品は、Aセット(500ml×6本)2,850円、Bセット（500ml×2本＋150ml×9本）2,700円、Cセット（150ml×12本）2,450円があります。各セットには、消費税、包装代金、送料（北陸、中部、信越、関東、南東北地方の場合）が含まれていてお得です。

【お問い合わせ】

たくみの里
ヨーグルト工房
〒379-1418
群馬県利根郡
みなかみ町須川847

財団法人
新治農村公園公社
TEL **0278-64-2211**
FAX 0278-64-2220
http://www.takuminosato.or.jp

協議会だより

全国水源の里連絡協議会　事務局
佐伯市役所　企画商工観光部　企画課総合政策係
住所：〒876-8585 大分県佐伯市中村南町１番１号
TEL：0972-22-3486（直通）　FAX：0972-22-3124
E-mail：s-suigen@city.saiki.lg.jp
http://www.suigennosato.com/index.htm

トピックス

参画自治体が166市町村に

平成23年４月、新たに大分県大分市に参画いただきました。協議会では、組織の拡大に向け多くの市町村の参画をお待ちしております。

監事に北海道中川町川口精雄（せいお）町長が就任

監事を務められていました、北海道中川町亀井義昭町長の退任に伴い、同町新町長の川口精雄町長に就任いただきました。今後とも水源の里の活性化に向けてご尽力いただきます。

インフォメーション

第３回 全国水源の里 フォトコンテスト作品募集

テーマ

水源の里の四季折々の自然風景、人々の生活や祭事、その地域を象徴する風物など、水源の里の魅力が表現された作品を募集します。

受付及び締切

平成23年７月１日から８月31日まで。最終日消印有効。

応募料

１点につき1,000円
（東日本大震災の義援金に充てさせていただきます。）

賞

グランプリ（　１名）賞金20万円
優　秀　賞（　３名）賞金　５万円
特　　選（20名）賞金　１万円

審査員

審査委員長　井上隆雄（日本写真家協会会員）
特別審査員　田沼武能（日本写真家協会会長）
　　井上博道（日本写真家協会会員）

応募・お問い合わせ先

下記連絡先、「フォトコンテスト係」まで
※詳細は、全国水源の里連絡協議会HPにて
http://www.suigennosato.com/index.htm

全国水源の里基金の募金にご協力を

全国水源の里連絡協議会では、「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」の理念のもと、全国に連帯の輪を広げ、水源の里の振興を図るため、全国の会員市町村に募金箱を設置し募金活動を実施しています。水源の里を守り、豊かな環境を次の世代に引き継いでいくために、ぜひ募金にご協力ください。

編集部より　読者アンケート＆プレゼント

『水の源』では、今後の誌面づくり充実のため、読者アンケートを実施いたします。ぜひ、皆様のご意見をお聞かせください。アンケートにお答えいただいた皆様の中から抽選で各３名様に、おすすめご当地グルメのコーナーで紹介しました「たくみの里　のむヨーグルト」か「どんちっち鰈入りカレー」をプレゼントいたします（賞品の指定はできません）。

官製はがきに、①水の源の誌面で面白かった記事②今後取り上げてほしい内容③水源の里への思いなど、あなたのご意見を記載し、住所、氏名、年齢、職業、性別、電話番号を明記の上、下記宛先までご応募下さい。
※アンケートの回答のない方は無効となります。
※当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。
※ご応募いただいた皆様の個人情報は、賞品発送以外の目的では使用いたしません。

応募先：下記連絡先、『水の源』読者アンケート係まで
締　切：平成23年７月20日消印有効

『水の源』定期購読者募集

本誌を定期購読していただける方を募集しています。
年間購読料：1,000円（年４回発行）
お申し込み：下記連絡先、『水の源』定期購読係まで

お問い合わせ・ご連絡先は
〒623－1122　京都府綾部市八津合町上荒木５番地（上林いきいきセンター）
綾部市水源の里・地域振興課
TEL 0773-54-0095　FAX 0773-54-0096　E-mail：suigen@city.ayabe.lg.jp

上流は下流を思い、下流は上流に感謝する

全国に広がる「水源の里」

私たちは水源の里を応援します !!

全国環境整備事業協同組合連合会・会長	玉川福和
全国農業協同組合連合会・代表理事理事長	宮下　弘
全国森林組合連合会・代表理事会長	林　正博
電気事業連合会・会長	八木　誠
独立行政法人　水資源機構・理事長	青山俊樹
社団法人全国浄化槽団体連合会・会長	上山健治郎
社団法人全国清涼飲料工業会・会長	前田　仁
社団法人大分県薬剤師会・会長	安東哲也

（敬称略）

水の源　第 13 号

企画・発行：全国水源の里連絡協議会

発行日：平成 23 年 6 月

編　集：「水の源」編集委員会